

出土した遺物

今回の調査では縄文時代と古代の遺物が少量出土しています。

縄文土器は底が尖った形で(10)、貝殻(9)や棒状の道具で文様を描く、明神裏Ⅲ式と呼ばれる早期中葉(約8,000年前)のもので、石器は加美町(旧宮崎町)湯の倉産の黒曜石製のものが多く(13・14)、石核やチップも出土していることから、周辺で黒曜石を用いた石器作りが行われたとみられます。

古代の遺物は須恵器の甕(1・2)・高台坏(3)、土師器の埴(4)、鉄鏃(5~7)が出土しています。須恵器の甕(1)・高台坏(3)、土師器の埴(4)は奈良時代(8世紀)に位置づけられるものです。



早風遺跡p地点出土遺物

まとめ

- ① 早風遺跡p地点の発掘調査を行い、堀1条、竪穴建物1棟、井戸1基などの古代の遺構を確認しました。
- ② 堀は東山官衙遺跡を囲む外郭区画施設と推定され、東辺南部の段丘上では外郭区画施設が土塁と堀から堀のみに変わると考えられます。また、堀で区画された内部の遺構密度が低いことがわかりました。
- ③ 今回の調査では壇の越遺跡の東西大路の延長部は発見されていませんが、周辺の地形から、東西大路は早風遺跡ではやや南東方向に位置がずれるとみられます。
- ④ 縄文時代早期中葉の土器や湯の倉産の黒曜石を主体とする石器が出土したことから、調査区周辺は縄文時代にも生活の場として利用されたことがわかりました。

早風遺跡

はじめに

宮城県多賀城跡調査研究所では、奈良・平安時代の陸奥国府・多賀城と関連する県内の遺跡の発掘調査を5ヵ年計画に基づいて実施しています。今年度は第9次5ヵ年計画の初年度にあたり、早風遺跡p地点の調査を行っています。

早風遺跡は田川の左岸、東山官衙遺跡の北～東側丘陵上に位置します。東山官衙遺跡は、8世紀前半(約1,300年前)に造られた陸奥国賀美郡衙と推定される役所跡で平成11年に国の史跡に指定されています。政務や儀式を執り行う政庁、米を収納する正倉や実務を行う施設等で構成され、全体は築地塀で囲まれています。また、南面には壇の越遺跡があり、東西・南北大路を基準とした街並み(方格地割)が整備されていました。

8世紀後半になると「三十八年戦争」と呼ばれる混乱の時代に突入し、蝦夷との緊張関係が高まります。東山官衙遺跡の背後の丘陵には新たに土塁が築かれ、守りが固められました。この土塁跡と内側が「早風遺跡」として登録されています。早風遺跡では、これまでに5地点で土塁と堀による大規模な区画施設跡が発見されており、壇の越遺跡南西部の築地塀や材木塀と一体となって、東山官衙遺跡の外郭区画施設を構成していたと考えられています。

調査要項

所在地: 宮城県加美郡加美町鳥屋ヶ崎字山畑道下
 調査指導: 多賀城跡調査研究委員会(委員長 佐藤 信)
 調査主体: 宮城県教育委員会(教育長 佐藤靖彦)
 共催: 加美町教育委員会(教育長 鎌田 稔)
 調査担当: 宮城県多賀城跡調査研究所
 加美町教育委員会生涯学習課
 調査期間: 令和6年5月14日~7月初旬(予定)
 調査面積: 約270㎡

発掘調査現地説明会資料
 令和6年6月22日(土)
 宮城県多賀城跡調査研究所
 加美町教育委員会



1. 東山官衙遺跡
2. 城生柵跡、菜切谷廃寺跡
3. 名生館官衙遺跡、伏見廃寺跡
4. 南小林遺跡
5. 小寺・杉の下遺跡
6. 三輪田・権現山遺跡
7. 新田柵跡
8. 城山裏土塁跡
9. 赤井遺跡
10. 一の関遺跡
11. 一里塚遺跡(黒川郡家跡)
12. 宮沢遺跡(玉造塞跡推定地)
13. 桃生城跡
14. 伊治城跡

図1 県北の城柵官衙遺跡と防衛ライン

8世紀中頃、大崎平野の北辺は律令国家と蝦夷の居住域の境界となっており、東山官衙遺跡は防衛ラインの西端に位置していました。



写真① 調査地点と東山官衙遺跡周辺(南上空から)

調査の目的

p地点は、標高約53～55mの段丘上に立地し、外郭区画施設東辺と壇の越遺跡の東西大路（南5道路）の東側延長の接続部分にあると推定されていました（図2）。今回は、東西大路の延長部の確認と門や櫓といった土塁に伴う施設の位置と構造を明らかにすることを目的として調査を行いました。

発見された主な遺構

発掘調査の結果、古代の遺構として堀1条、あなたたもの 竪穴建物1棟、井戸1基などを確認しました（図3）。

堀

上幅約3.5m、深さ約60cmの堀で、長さ約9.1m分を検出しました。堆積土中に10世紀前半に降下した灰白色火山灰が厚さ約10cm堆積していることから（写真③）、火山灰の降下前に構築されたことがわかります。



写真② 堀（北から）



写真③ 堀の横断面（北から）

堀の規模、真北方向に延びることや位置関係から東山官衙遺跡を囲む外郭区画施設と推定されます。東辺南部の段丘上では土塁と堀（第2図右上）から堀のみに変わると考えられます。

竪穴建物

規模は東西約3.8m、南北約4.0mで、平面形は隅丸方形です。壁際には幅7cm程度の壁材痕跡がめぐります。カマドは北辺の中央にあり、白色粘土で構築されています。カマドの手前から建物南東外に延びる外延溝を有するのが特徴です。建物内から遺物がほとんど出土していないことから、廃絶時に生活用品を持ち出したと考えられます。



写真④ 竪穴建物（南東上空から）

東西大路の延長部について

今回の調査区では東西大路の延長部が発見されませんでした。周辺の地形から、壇の越遺跡の東西大路は、早風遺跡では調査区西側の張り出した小高い丘を避けてやや南東方向に位置がずれると推定されます。



写真⑤ 東西大路延長部の推定ライン（南東上空から）

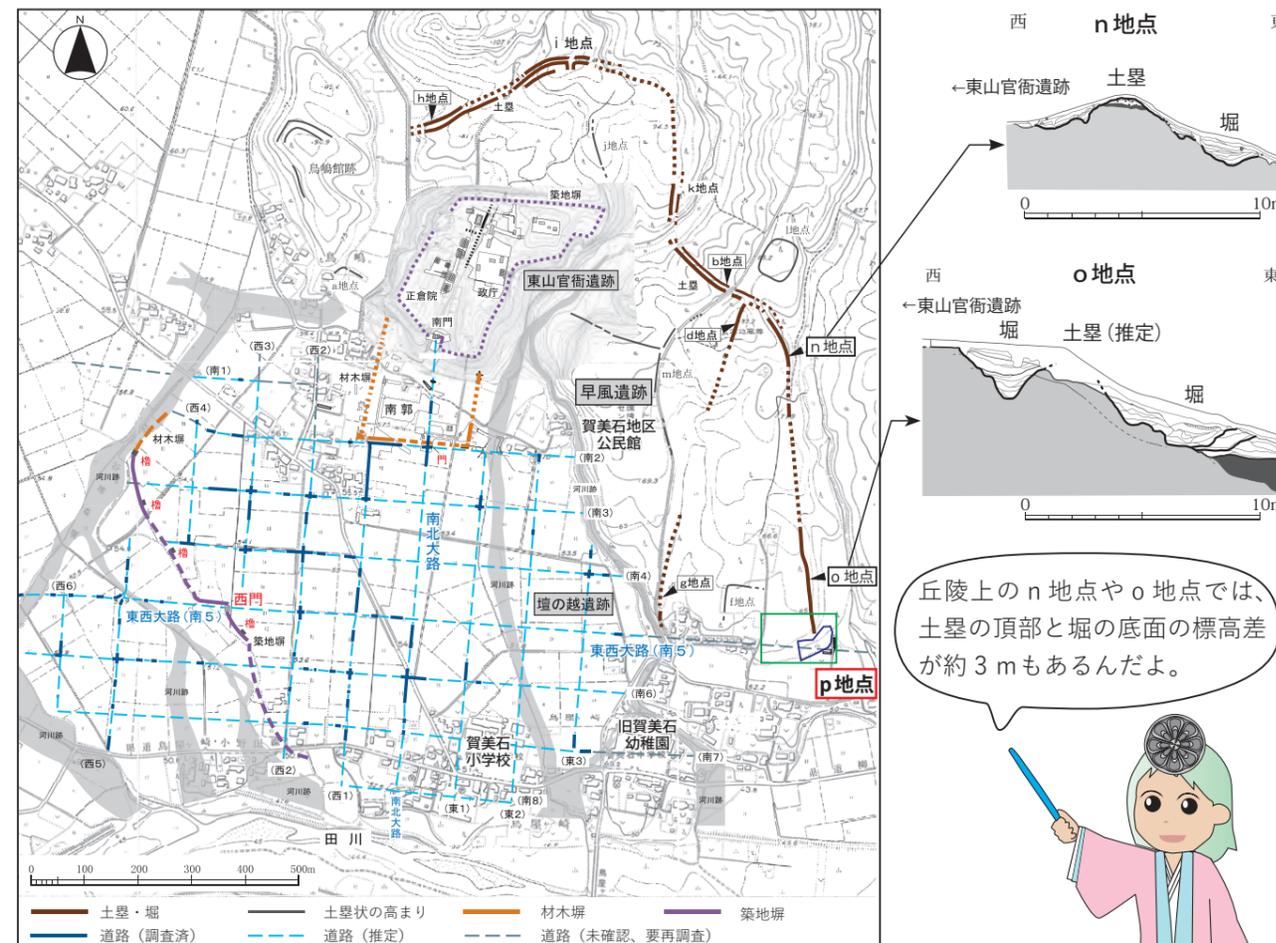


図2 東山官衙遺跡群全体図

丘陵上のn地点やo地点では、土塁の頂部と堀の底面の標高差が約3mもあるんだよ。



れんげもんちゃん

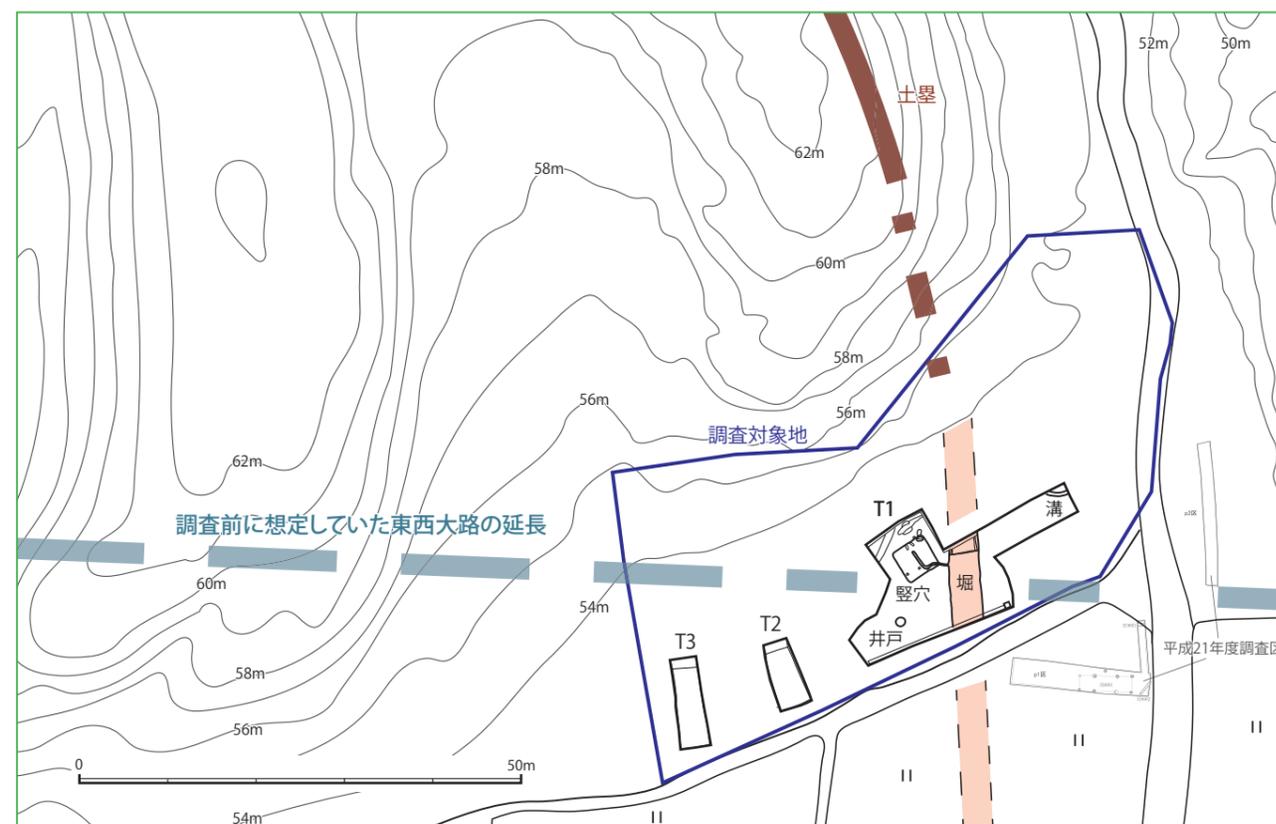


図3 早風遺跡p地点の平面概略図